



# カメラガミと 暮らした日々 高見のっぽ

「あなたのテレビ、あの有名な『工作番組』は何年つづいたんですか？」  
 「かれこれ24年間、回数にして1000回」  
 「ほう、大したもんだ。で、その間、ほかにお仕事は？」  
 「なしたる能もなし。あれだけです」  
 「すると、あれですな。あなたの暮らし向きを支えていたのは紙、紙ですぞ!!」  
 「はあ!!」  
 「工作と言えば紙でしょう。紙がなければ1000回が1000回、そのうちの一回だに番組として成り立たず、したがってあなたの暮らしも成り立たず」  
 「うへえ!!、そうなるんですかあ」  
 「忘れてたんでしょ!!」この恩じやあ、ちよいと稱やかならざる会話になったが、これ、この「紙と私」欄を前にして

の自問自答であるから御心配なく、とりあえず、紙に対する思い、想いを新たに、当時の造型担当の先生に質問状を送った。以下はその返事である

(一)ダンボール紙 タタミ一枚の大きさで、厚いもの薄いものを使いわけながら立体物・セットを作ったりした。

(二)クラフト紙 つすい紙で新聞見開きより大きいもの。丈夫だったから探んでシワにしても破れず、丸めてカタマリにしたり、つなげて特大の紙を作ったりした。

(三)白ボール紙 厚いもの薄いもの両方共よく使用した。主として立体の工作物

(四)ラシャ紙 豊富な色を必要とする時に使った。小さく切れば画用紙にもなった。

(五)新聞紙・空箱・牛乳パックなど、ありとあらゆる紙製品の廃物利用

(一)(三)(四)(五) これだけあれば、それぞれ、何でも作れた!! オワリ。

さて、話はそれからである。

『それこそ、何でも作れた!!』は美に自信に満ちた力強い言葉だが、これは真つサラの紙を前にして湧き起るイメージに武者ぶるいする造型作家のものであつて、この私は造型作家ではなかつたのである。

教えられた通り、折り、たたみ、切り、クシャクシャにする時、紙が次には素敵



高見のっぽ(たかみのっぽ) 1934年京都府生まれ。1990年まで24年間、NHK教育テレビ「できるかな」のノブ亦さんとして出演。NHKみんなのうた「グラスホッパー物語」で、歌、出演、振付、作詞を担当。現在は、童話やエッセイの執筆のほか、ステージ、イベント、講演など幅広く活躍中。

な造型物という高みに昇るのたとは承知していたが、どこか真つサラの紙をいじめているという感じが私にはあつた。そして床に無残な姿で散らばる無数の紙の切れ端を見ると……正直に言つが、「こりや絶対に無駄使いだ。勿体ないぜ」なんて思つたりもしていたのである。

番組がおわつて、もう何年になるか小さい頃に私を見て、そして今は大きくなった人々がよく会いに来てくれる。その人々のなかで、如何にも誇らし気に「私の仕事、なんだかわかりますか?」と問つてくるひとの多いこと、私は「ニツツとする」。

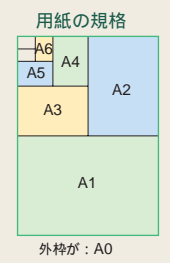
「ええとね、デザイナーだな」  
 「うわっ、当たっちゃった。広告デザイナーです。ほく、貴方を見てこうなりました」  
 「ごめんよ。難しい仕事をえらばせて、なにを言つんですか。ぼくは大丈夫ですって」  
 私は「この時、ちよびり安心するのである。」  
 「紙をムタに使つてはいなかつたなあ」

## PAPER Q & A Vol.1

### Q. 紙のサイズはどのように決まっているのですか?

A. A4は210×297mm。一見、半端な大きさに思うかもしれませんが、調和のとれた合理的なサイズです。

紙の寸法規格の制定にはドイツの物理化学者オストワルド(1853 - 1932年)が貢献しています。彼は、右の図のように、「ルート長方形」という合理的な寸法規格を作り出しました。まず、面積を1m<sup>2</sup>とし、幅と長さの比率を1: 2とした用紙を「A0判」として決め、その長辺を半分にする度にA1、A2、A3、A4……と小さくしていき、A10判までを設定。ルート長方形は、長辺で半分に分けると、面積はつねに二等分され、いずれも幅と長さの比が1: 2の相似形となり、実用上無駄の出ない合理的なサイズ。これが現在の国際規格となり、日本でも使用されています。尚、B0判はA0判の1.5倍で日本独自の規格。江戸時代の公用紙=美濃紙の大きさに由来しています。



次回は6月8日号、倉本聰さんです。